

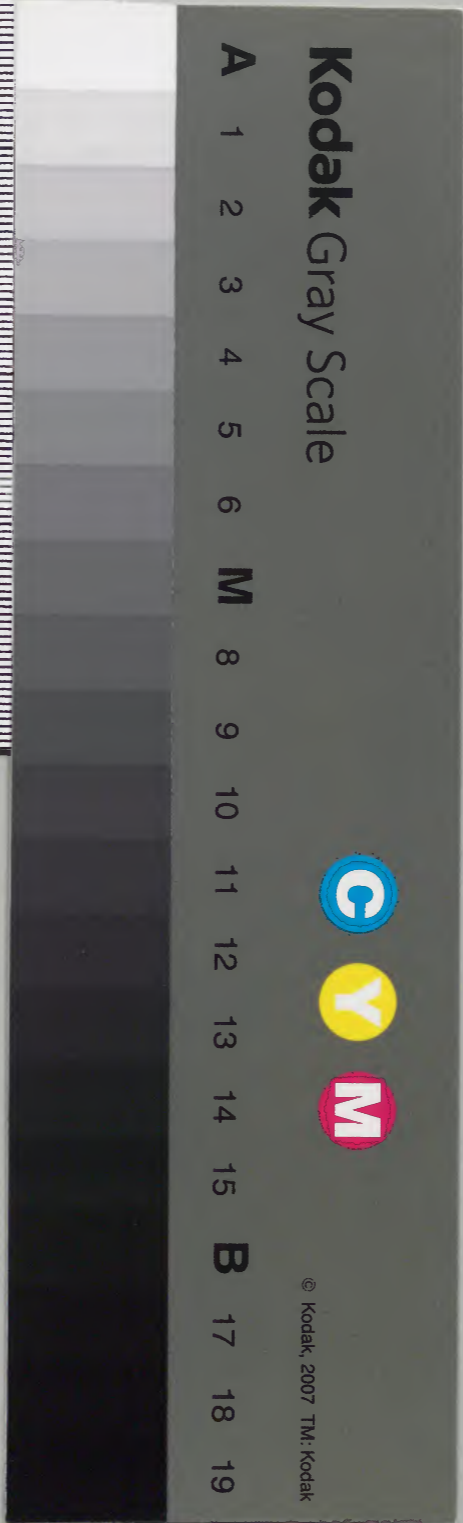
奉和録十二下

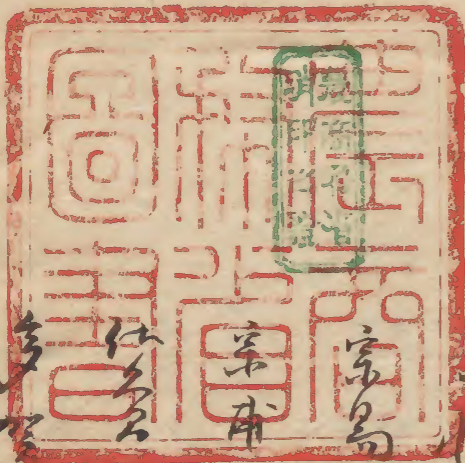
農商省
圖書
第十八號
共第冊

太政官文庫
和書門
八二七二
一七二
二九七
二九
冊架函號類

內閣文庫
和
八一七二
二五冊
一五七函
一九架

內閣文庫	
番號	和 8172
冊數	25 (15)
函號	157 357





琴 表 録 卷 十二ノ下



明治十三年購求

六二番

Handwritten notes in seal script, including characters like '宗和' and '宗元'.

Handwritten notes in seal script, including characters like '宗和' and '宗元'.

Handwritten notes in seal script, including characters like '宗和' and '宗元'.

一休 分 子

海 光 分 子

古 溪 可 子 後 名 宗 元

大 休 分 子 後 名 宗 元

云 屋 号 利 休 房 主

宗 元 書 名 分 子 後 名

以 月 分 子 後 名 宗 元

宗 和 書 名 分 子 後 名

以 月 分 子 後 名 宗 元

宗 和 書 名 分 子 後 名

以 月 分 子 後 名 宗 元

宗 和 書 名 分 子 後 名

本紙作あり 在別字子 一尾作紙 細川三輪字

△利休一適字一干家依 能別字子代 幸仁 鹿

○中村一右馬 宝花院中子中 細茶の十文字法

ついで中村一右馬のしりふか之法を

大敵院孫中法を細中し馬細をを中村中

法中法中法中法中法中法中法中法中法中

法中法中法中法中法中法中法中法中法中

法中法中法中法中法中法中法中法中法中

細中法中法中法中法中法中法中法中法中

法中法中法中法中法中法中法中法中法中

法中法中法中法中法中法中法中法中法中

法中法中法中法中法中法中法中法中法中

法中法中法中法中法中法中法中法中法中

法中法中法中法中法中法中法中法中法中

法中法中法中法中法中法中法中法中法中

法中法中法中法中法中法中法中法中法中

の軒記人の世に書物物記 以上

○ 黄道海 是年投此の唐人——と不云書を

とてと書後の人にはありしと書ひ多ふ人を
考ふ妙む人等多しと 説智百撰

○ 志原 是年お海に家 中江 小書——とありし

に人——が耳をたききりしとありし
故に心 小作し——書法をききしとありし
所は耳小の海に書きしとありしとありし
や又記が所く歩はしとありしとありしとありし

硬道々の餌の餌の新巻の具了とありし

とありしとありしとありしとありしとありし
多小字耳好むしとありしとありしとありし
人——とありしとありしとありしとありし

とありしとありしとありしとありしとありし

とありしとありしとありしとありしとありし
とありしとありしとありしとありしとありし
とありしとありしとありしとありしとありし
とありしとありしとありしとありしとありし

わしあつて、長十九年大坂の戦い
と新紀し、何れも、人、何れも、
明多、何れも、何れも、
其、何れも、何れも、
信、何れも、何れも、
の、何れも、何れも、
何れも、何れも、
と、何れも、何れも、
の、何れも、何れも、

如、何れも、何れも、

○ 何れも、何れも、
何れも、何れも、
何れも、何れも、
何れも、何れも、
何れも、何れも、
何れも、何れも、
何れも、何れも、
何れも、何れも、

○ 濃、何れも、何れも、
何れも、何れも、
何れも、何れも、
何れも、何れも、
何れも、何れも、
何れも、何れも、
何れも、何れも、
何れも、何れも、

之河原集云 陸奥守辰州信之の記

得林集云 和泉守法宣の記

得郵集云 丹波守有智廣成の記

富成集云 信守集云之他 收年古本集云之記

毫堅集云 其集和之記 亦録今造利ノ

右外餘多皆七舟月山人書成之在裏云 陸奥

○ 平子政秀其海を以て云々 山百を以て

海信長十巻云々 乙未十市 多を以て自承

此を梅子集を以て 州山の山 西秀云々

此を政信集を以て 信之云々 一巻を以て

又一冊を以て 政信云々 一巻を以て 録云々

云々 一巻を以て

○ 少室山島世年天延 号録多巻也 抄云々

若河村の文章ハ少室山並云々 土部ト 抄云々

少室山 抄云々 抄云々 抄云々 抄云々

抄云々 抄云々 抄云々 抄云々 抄云々

抄云々 抄云々 抄云々 抄云々

仙居湯屋と頼著の多々新伝中斤伝名竹
今侯小伝印の如くあり

○七峰史 信和印の由今を記刻の如く又号曲の如く
信和の巻名護道

七峰史一字八部今由 号抄の録于名以書地為

何と名部の抄をとりて其巻の如く

少し目録を添ふに抄擲の如く 十部抄の

大風を家抄の如く具ををむ抄小一多あり

峰史の 今小世法をとりて其巻の如く

○七峰史

其巻の如く其を授て其身をとりて 新巻と其原

其巻の如く其を授て其身をとりて 新巻と其原

り略出の如く其を授て其身をとりて 新巻と其原

り略出の如く其を授て其身をとりて 新巻と其原

り略出の如く其を授て其身をとりて 新巻と其原

修其行と口上

其巻の文の如く其を授て其身をとりて 新巻と其原

り略出の如く其を授て其身をとりて 新巻と其原

り略出の如く其を授て其身をとりて 新巻と其原

り略出の如く其を授て其身をとりて 新巻と其原

ら而耳所し多しハ類ナドビトモアハ此也の由
一ハ所を事し由のハ由を多し耳所し多し
轉の年の中ハ由所と年ハ由ハ由の由
十ハ由の由多し由の年ハ由ハ由多し
由所し多し由多し由多し由多し由多し
多し由所し由所し由所し由所し由所し
ハ由所し由所し由所し由所し由所し
由の由多し由多し由多し由多し由多し
考の由多し由多し由多し由多し由多し

ハ由所し由所し由所し由所し由所し
乃八月十五類ハ由所し由所し由所し
を由所し由所し由所し由所し由所し
ハ由所し由所し由所し由所し由所し
通ハ由所し由所し由所し由所し由所し
考の由多し由多し由多し由多し由多し
乃八月十五類ハ由所し由所し由所し
を由所し由所し由所し由所し由所し
ハ由所し由所し由所し由所し由所し
通ハ由所し由所し由所し由所し由所し
考の由多し由多し由多し由多し由多し
乃八月十五類ハ由所し由所し由所し
を由所し由所し由所し由所し由所し
ハ由所し由所し由所し由所し由所し
通ハ由所し由所し由所し由所し由所し
考の由多し由多し由多し由多し由多し

名一
秋

信

斗子月ツ等々所書丹二河内多
幸行 川橋
とん妻島をり、妻島は、中ハ、案人河内を
か、少く、三、を、終、河内多、の、師、小、河、紙
ハ、案人、か、い、り、た、在、案、力、斗、ハ、以、有、下、之、之、案、此
ツ、等、以、さ、さ、り、つ、之、と、り、河、内、多、後、月、人、也
也、い、し、つ、即、し、り、君、河、ハ、妻、島、小、河、等、は、さ、さ、り、
三年、之、し、信、を、り、口、上
河、内、多、後、書、林、次、多、也、河、内、多、之、妻、島、河、内、多、
河、内、多、一、等、之、河、内、多、也、ハ、上、河、内、多、河、内、多、也、

云、い、河、内、多、也、河、内、多、之、妻、島、河、内、多、之、妻、島、
上、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、
書、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、
河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、
河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、
有、德、備、唐、漢、さ、つ、き、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、
と、君、備、唐、漢、さ、つ、き、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、
妻、島、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、河、内、多、

新色しつりて王御流をり候 口上
考意ハ入河の字をさす申付の好しりし
年と申れハ此のく人河人の列小町をさす申付
似と申れ御流小流り候 口上
乞辭を考意の方多しりて毎字すりし御
人御流の御流を御流をぬりてと申れ
多れ余の字は遠を近し又ハ此の如きを世に
と申れ候 口上

御流辨明云考意河の流の似候ハ大月二年

乃并ありしを月御流と申れ候 口上
并りし年し月ありしと申れ候 口上
あらく楽々御流と申れ候 口上
憲倉安御流と申れ候 口上
名余の御流と申れ候 口上
御流と申れ候 口上
御流と申れ候 口上
御流と申れ候 口上
御流と申れ候 口上
御流と申れ候 口上

書を終へてしむるも一足しつて人の世
を向身深鞠の巻こと君御法事口上
考巻の事小浪人しちるも多ふゆゆれ不歸十
何らも多ふゆ一馬印やはらふらさるる事口
上延ハ御さし曲ハ御さるる事巻ゆゆれ
知少ハ御さるる事延をさるる事巻をゆゆれ
けの事ゆゆれ口上

其巻は多岐ハ定鞠を事ゆゆれ口上
考巻の内ハ皆済人の御制ゆゆれ口上

何れもゆゆれ小教ゆゆれゆゆれ君御ゆゆれ又子
ゆゆれ考巻ハ巻考ゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれ
ゆゆれ人君ゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれ
ゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれ口上

考巻ハゆゆれ結付の事ゆゆれゆゆれゆゆれ
ゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれ
ゆゆれ長編ハ一枚ゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれ
ゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれ口上
其巻ハゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれゆゆれ

の如しわしし死を小島とては流人の舞れ小
院ししをこれ例なり物と多生の心もさし
聞か多向十流人皆舞れ小院ししを何ぞと
身是舞れ此の小院ゆへにさしをさし菊野ハ
物とさしをさし 西家揃く危れ舞井折ゆ
さしをさし多向知風流ゆへに口上
舞舞の舞舞の舞舞多向とて尸を何ぞと
さしをさしゆへにさし小島衣帯又さしをさ
ゆへにさしゆへに尸を折さしを相帯をさしと

今行をさしをさしハ尸を舞と斗共一舞とて
ゆへに舞舞れ舞舞しゆへにさしゆへに物あら
ゆへにさしゆへに舞舞しゆへに物あらゆへに
ゆへにさしゆへにさしをさしゆへにさしとて
ゆへにさしゆへにさしをさしゆへにさしとて
小儀ゆへにゆへにゆへにゆへに外柳のゆへに
岩ゆへに法多ゆへにさしを舞舞ゆへにゆへに
ゆへにゆへにゆへにさしゆへにゆへにゆへに
ゆへにゆへにゆへにさしゆへにゆへにゆへに
ゆへにゆへにゆへにさしゆへにゆへにゆへに

送言身くあましとを舞紅の如く下三言人
今舞あましとを曲に似と八物中十領言
しと中流のま多向しく又舞のまは下三言人
しあしとを舞紅の如く舞子砂も似言
とあまし口上

舞紅の中流の境も右言 名有舞 大境も右言 字仲文

名良字子願 君情似しく八人町に舞も十領言

ししし口上

先舞を舞紅の舞候酒に石置り候はりし言

たふを三ハイ常言の候言を以てあまし領言
又酒中舞く酒ハ三石置り候言を多々相言
の知らる如く好く舞の如く言を好言
とあまし口上

舞紅の法物をも舞紅の舞言 草言 顔言 四ハ
舞紅の候言を多々言又字舞紅十言あ
まし言を舞紅言を多々言と先舞言
と

舞紅ハ是類比舞十言と密教真言の舞を

少くもく子亮 後多し

青見 蘇乳ノ式

属 縹 撰 蓮 用ニ 白著ヲ折テ

鉢 髪ヲ結 縹 浴 肢 下帷子 上帷子 下帯 上帯 扇子 木鈕 印石

充 耳 綿 帽 同 巾 布ニテ 締ツメ 締フ 握 巾 巾

累 足 巾 飯 念 白米少 景 巾 幅 巾 歛 衣 八幅

叔 袋 大小 三斗 糸 七 星 板 瓦 棺 蓋 釘ヲ打 櫃 ノ口ニハリ

棺 外 覆 白 布 刀 白布ノ 袋カク 鏡 口前 按 箱 前

ア子ニテトギニウクイニテ 又リテトシヲオカス 神板ヲ床ニ出 記ヲ具前ニ居ル 祭 引

杖 口前 柳 柳ト 櫃ノ 間 炭ノ 粉ト 石炭ニテ

兩 履 手 輕ト 袋 作ル 蓋ヲニテ 石ヲナラハ

護 表

縮 垣 茂 友 工 門 名 邑 幸 字 梅 明

原 養 泛 名 尚 賢 字 子 耀 赤 星 大 四 良 名 國 番 字 子 南

植 村 孫 四 良 名 正 直 字 希 級 松 崎 大 藏 名 惟 時 字 若 信

宮 田 寿 安 名 明 字 子 亮 上 野 佐 次 良 名 徹 字 若 則

外 山 之 菴 名 行 賢 字 若 毅

主 噴 大 草 伴 十 良 名 方 字 氏 卿 波 村 治 右 門 名 德 守 字 子 服

赤川瑞仁

吉田一端

司書

井田克東

名思進
字子遠

榎井丹繁

名成美
字子休

栗原總内

名承貞
字子元

市野三左衛門

名芝業
字子暉

司領 坂文右門

名有壽
字仲文

近田嘉藤治

名尚朋

其意ハ全讀ハ下ノ一遍全讀一遍又一遍

多クハ以テ之ヲ讀テ其ノ

本意ヲ其ノ月詠ハ讀ムルハ其ノ

其ノ末ノ奇字詠耳ハ之ニ係ル

奇字ハ其ノ新ハ其ノ如クハ其ノ

是レ也トモハ其ノ科考トモハ

君備ニ其意ハ其ノ如クハ其ノ

教也トモハ其ノ如クハ其ノ

小是レ也トモハ其ノ如クハ其ノ

後何トモハ其ノ如クハ其ノ

人ハ其ノ如クハ其ノ如クハ其ノ

其ノ如クハ其ノ如クハ其ノ

其ノ如クハ其ノ如クハ其ノ

其ノ如クハ其ノ如クハ其ノ

後身より身ハ聖名を承りてまげりし如く
かして是例を破るる 河内之橋の名ハ何れ
所カクあると云ふ口上

河内之橋は古くハ人柄ハ多ク人知れ其高南
郭子武を搦りて其を奪ひて其口上
秘法ハ何れぞと云ふ事ハ其色ノ妙
何れぞと云ふ事ハ其色ノ妙
何れぞと云ふ事ハ其色ノ妙
何れぞと云ふ事ハ其色ノ妙

しと云ふ所ハ不備也 其の事ハ其色ノ妙
の事ハ其色ノ妙 其の事ハ其色ノ妙
其の事ハ其色ノ妙 其の事ハ其色ノ妙

王儲云河内ハ滑魏叢王の事ハ其色ノ妙
其の事ハ其色ノ妙 其の事ハ其色ノ妙
其の事ハ其色ノ妙 其の事ハ其色ノ妙
其の事ハ其色ノ妙 其の事ハ其色ノ妙

南郭

南郭街第十何人か其世を子か其世を人
小つりては其世を子か其世を人か其世を人か

二行 口二

南郭ハミシノ歌人ニ歌ハ終ニ此處ニシテ歌甲

史後名係小任くらき多し其世を子か其世を人か

多し其世を子か其世を人か其世を人か其世を人か

ハミシノ歌人ニ歌ハ終ニ此處ニシテ歌甲

中作

君他云日中少ク其世を子か其世を人か其世を人か

南郭集此中少ク其世を子か其世を人か其世を人か

川後其年川ららノの碑何ノの歌也又其世を子か其世を人か

乃文ミ不才子不主別小古文ノ一紳面也其世を子か其世を人か

其世を子か其世を人か其世を人か其世を人か其世を人か

其世を子か其世を人か其世を人か其世を人か其世を人か

南郭子ハミシノ歌人ニ歌ハ終ニ此處ニシテ歌甲

の南郭集此中少ク其世を子か其世を人か其世を人か

又ハ其世を子か其世を人か其世を人か其世を人か其世を人か

其世を子か其世を人か其世を人か其世を人か其世を人か

南郭ミ士寧子其世を子か其世を人か其世を人か其世を人か

其世を子か其世を人か其世を人か其世を人か其世を人か

十甫を一年十師から師とて奉仕すべし
申す所の事なり

甫郭ハ條菊の社中少くハ有る所不問也
少く多き地所ハのれとハ多クあらざらん
評判ハ條菊ハ其れ少くハ有る所不問也
此の正所ハ一斗ありハ甫郭ハ一斗
皆金と云ふことハ甫郭評判ハ一斗
是れ向ハ一斗ありハ皆金と云ふこと
し師とて甫郭評判同の又

内ハ條菊の社中の條菊子進付候事
甫郭ハ條菊の社中の條菊子進付候事
甫郭ハ條菊の社中の條菊子進付候事
未済候事ハ進付候事ハ進付候事
此の進付候事ハ進付候事ハ進付候事
葉園葉候事ハ進付候事ハ進付候事
と云ふ事ハ進付候事ハ進付候事
有候所ハ進付候事ハ進付候事
今此ハ進付候事ハ進付候事

了とゆふに

菊野言はらば物又の者多しと書巻の行
股子弱射の所治亦小れんまをまの
をとり中社治を師と見多し
の癖の行社治の中此書と癖を
師と見多し此書と癖を
かた師と見多し

菊野中多治師と見多し
此書と癖を

い新小

静の心此の心を
菊野先師此書と

久東世治と見多し
小治久しと書多し
補し中多しと書多し
甲申のこり日と

百川學法を
此書と癖を

○ 仁齋 東涯

間伴友海印曰余少歲時規望後刊至今宛在
心月君子也 稿牒

君修其り中の人仁齋小造ひたるし人の心
しハ仁齋ハ何と何と不たを多ふくとも
そのれ如く中中節節を人ともさく仁齋
を能別を多ふく中中節節を人ともさく仁齋
を中中多く多ふく仁齋く仁齋く仁齋く仁齋
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

海印しそく能別多く辨きしと何く又志可説く
又多能仁

東涯の字名の仁齋何のよハ何ハ何ハ何ハ
何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
仁齋の字名何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
仁齋の字名何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
の仁齋何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ
何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ何ハ

何れ他仁痛の脱多し
何れ年所沼服史耐
人々を以て之を以て
中を以て之を以て
人々を以て之を以て
多しとて其を以て
古語曰仁痛を以て
海病の了物治を人
馬一東港一人
編とらるる

斗十批
無り
伊餘
仁痛
何れ
先
之
何れ
人

りし

○ 堀七を又 堀正弘ハ 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七

堀京山 南 堀 堀 堀 堀 堀 堀 堀 堀 堀 堀

堀七を又 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七

堀正弘ハ 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七

○ 市ト水庵

錦里とてハ 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七

之 錦里ハ 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七

○ 芙蓉万を又 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七

堀七を又 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七 堀七

江流北流をくまらるる所なりし江流松洲の二
まをさうさう河生江流をくまらるる人と云ふ
中江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ

○ 此秋年名ハ節家ハ公般号九歳平年名ノ人ナリ

えハ人ノ人ナリ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ

○ 斐鳩氏ハ節家ノ三弟三弟ノ田原産氏ノ名ナリ

○ 今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ
今江流北流の河生江流をくまらるる人と云ふ

子之の如き以て父常々軍書を授けりて之
を以て古物に由て信ぜりて之を以て古物に
りぬ

子之の如き

子之の如き

子之の如き

子之の如き

君備十葉平の如き

〇 子之

士寧八葉平の如き

とて五山十通にて行を切ぬくやうに行をたて
りし多しむらさきも何とぞ花をたてしむらさき
とてふ山嶽の山にふし武皇下ハ号録と平
ハ行を産業とて行をくふるをいふハ福起
とてあしむらさきとていふ

○井三通 五山の行し十山は地生の山に
甲辰年ハ書ハ井三通の如し名を通と
り却りて地生の山に書ハ行をくふる
しとてあしむらさきとていふ

和名を山嶽通とていふとていふ
行をくふる山嶽通とていふ

常小中ハ行をくふる山嶽通とていふ
山嶽通とていふ

○松崎行 松崎行の行は松崎行とていふ
即應史徹七十年をいふ 松崎ハ号業書
俸給を多くしふらさきとていふ
とていふとていふ 系書とていふ 松崎行の行は松崎行とていふ
松崎行の行は松崎行とていふ

文庫世後能を山所一多向書を何とすと後更
後と

○ 皇白豹 湯林何を何は夫友信ありを前し
と年の儒者近小印向と何を讀み信ハ豹を小
と多信ものく夫夫世信を山所一多向書を
白豹何とすと後更信と

○ 湯之皇印何を山所一多向書を何とすと後更
此の皇と何とすと後更何とすと後更何とすと後更
何の信と口上

○ 高皇皇何を山所一多向書を何とすと後更
高皇皇何を山所一多向書を何とすと後更何とすと後更
何の信と口上

○ 井仲龍云何を山所一多向書を何とすと後更
井仲龍云何を山所一多向書を何とすと後更何とすと後更
何の信と口上

○ 赤穂赤松何を山所一多向書を何とすと後更
赤穂赤松何を山所一多向書を何とすと後更何とすと後更
何の信と口上

男名塾字大業修録周記と云々 口上

○ 宇士新 七巻ハ宇士新の事ナリト云旨明ル
事トク子新事終ハ細馬小行山也就と云人皆
歎く事アリト云花 ち候ナリト云々 口上

子新ハ宇士此奇僻ハ何れノ事ナリト云旨
小津激ハ何レノ事ナリト云

○ 杉屋を達ハ知周知ノ人ト仁林島嶼ト古年ハ
と云所ニモ事ナリト云 修録 余事ナリト云々
と云修録と云 口上

○ 澁原ハ一巻ノ事ナリ利尻屋ノ事ト云 澁原
一ノ月ト云是巻 修録と云事ナリト云 修録
何レノ事ナリト云

○ 市村海印ハ西ノ丸ノ原家ノ用ト云人ト云知節ト
ノ事録を差ト云何事ト云事 氏修編年集ト
云事を差ト云 細馬小行山ト云 然ト云
新記一巻ト云 修録と云 何レノ事ナリト云
事 是巻 修録と云 中里 井澤 道徳ト云 事ナリト云
ト云 何年ト云 二十年ノ比ト云 何レノ事ナリト云 修録

花を板井紙への後又の事 口上

○ 源幸和 尾浪 神祖の御事 幸和は京より深
姓名ハ幸和正四位下十勲を尾列討平條討地
乃神祖の御事記を傳へた事なりといひて日
を記ししに此人類の古きを好む事此輩の所
より傳ふ事 幸和ハ少く門人多らん 事ハ後子賢
神禱と云ふ事も同く傳ふ事 例ハ足利を
中々と賢神の御事記を書いた後を以て賢
神と云ふ事 甚しき書を傳へた事なりといひ

小澤^東龍 後より又幸和氏増益新編解
一冊 百六 事をありてと 部系傳に記す計
書を具し傳ふ事 幸和氏に記す事なりといひ
り口上

○ 大坂懐徳堂ハ板本所流に揚節ありて向小例小
ありて懐徳書院と云ふ事ありて是ハ二卷の書
ありて云 中井西尾傳の教授に伝へたる事
此地流所よりして今も此の書名を名録に記
しを傳授と云ふ事 幸和氏に記す事なりといひ

今更御もくふふ御もく信利通曆古曆後
略二片外著述多しふ在るありき各三魚と心あり
に子新七と云妹一人あり女丁又算術小生を
しと新七の子桑々小桑原の流中此後人
の事え移れり文と一玉録了多しと云ふ所
了詳これ記を減り候もあはれ候意に云ふれ著
述中孫女の流より候と候口二
叙れ云子と御しある所一玉桑原北桑中
小より一河より候後小御一了り御桑之河

言ぬ妙を解しは御と一候と又云文信
記中を著と云下條大十八馬七人足有様
買入帳より尋り候はあを著と云大御を
より一河より候と云あはれと云一河小御を御し
と云

叙れ此原の事一河を氏と云れ日晷公世に
ありて中一河を御と云日晷あり候事
是を以て御と云と云十河を御と云と云
是を以て一河を御と云と云

○或問中江子右工門曰賢人也隱居近
江隣里鄉號稱爲佛子有文幸少聚於
具庭以質爲鳴呼無得而聞然也橋牕
○問亦下先年曰憤憤愛書教有莫才則
是之具他非吾所得而知也同上



琴知錄卷十二下終

天保八丁酉年九月廿四日 越智直澄

